

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

18 王子のあかし

「もう良い」

一言だけ、王様が言いました。兵士や家来たちは頭を深々と下げ、次の命令を待ちます。

歳取ったひとりの兵士が、ニーダマの顔をじつと見ています。たしかに、見れば見るほどこの男の顔は、十年前のニーダマ王子の顔にうり二つなようにも思えてきます。でも、男の話はいかにも作り話のようで、信じようという気にもなれません。若い兵士たちは、早く男を牢に放り込みたくて、うずうずしていました。

「もしも……、もしもお前が、ほんとうに私の息子であるというのなら」

王様の言葉に、ニーダマが拳を握りしめます。

「王の一族として、王子としてふさわしい行いをしてみよ。王子であることのあかしを立ててみよ」

「王子であることの……あかし」

王様の言葉をくり返したニーダマは、言葉をかみしめて考えます。でも、どうすれば良いのかはまるでわかりませんでした。

「私は王子です。王子であるからには、すべての行いは王子にふさわしいもの。そのあかしを立てるなど、どうしたらよいのか……」

「盗人の行いが王子にふさわしいなどと、よくも言えたものだ！」

若い兵士が我慢し切れずに言いました。ニーダマはその声の主をきつとにらみつけました。兵士は負けずに言います。

「こそこそとお城に忍び込んだくせに！」

「こそこそと、だと……」

ニーダマが言い返そうとすると、王様の怒った声がとどろきました。

「ええい、うるさい！ やはりお前は王子などではない。言葉の端々に卑しさがにじみ出ている。こやつをつまみ出せ！」

「待つてください、父上殿！　そうですとも、私はこそそと城に忍び込みました。私、ち、ち、ち、一族しか知らぬ、秘密の抜け穴を通つて！」

後ろを向いて立ち去ろうとしていた王様がぴくりと眉を上げ、再び振り向きしました。

でも口を開こうとはしない王様に、ニーダマが言います。

「これこそ、王子であることのあかしではないですか！」

どうだと言わんばかりのニーダマに、王様は言います。

「この城にそのような抜け道などはない。あるものか！　お前がどうやって入ってきたのかは知らぬが、ざれ言を申すでない。いいか、堂々と勇氣ある行いを示すことですか、王の一族であることのあかしを立てることはできぬのだ」

「で、では！」

兵士たちに連れ去られながらも、ニーダマが叫びます。

「私は堂々と勇氣ある行いで、必ずや王子であることのあかしを立てます！　父上殿、私があかしを立てたあかつきには、必ずや私をもう一度王子として城にお迎えくださいますね？」

王様は何も答えませんでした。もちろん、王様が何か言ったとしても、石段を大勢で駆け降りる音に包まれたニーダマには何も聞こえはしなかったのですが――。

〈つづく〉